



## デボラ・フォアマン高野先生のご退職によせて

著者	山本 妙
雑誌名	コミュニカーレ
号	4
ページ	123-125
発行年	2015-03
権利	同志社大学グローバル・コミュニケーション学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000014027">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000014027</a>

## デボラ・フォアマン高野先生のご退職によせて

山 本 妙

フォアマン先生を送る文章を書くのは、私にとって名誉であると同時に悲しみです。私が入社した一年後に、先生は同志社に着任されました。最初に言語文化教育研究センター（以下言文センターと略す）の事務室でお会いした時に自己紹介をし、「一緒に仕事をし、あなたから学べることは喜びだ」という意味のことを言ったことを覚えています。それ以来24年間、デビ先生と共に過ごした年月は私にとって、まさにそのようなものでした。

フォアマン先生と日本との関わりは長きにわたります。1971年にフロリダ・プレスビテリアン大学を卒業後、高松第一高等学校に姉妹都市交換講師として一年間赴任され、続いて香川県立文化センター英語講師としてさらに一年滞日。その後米国に戻り、1973年8月から1975年8月まで、イリノイ大学アーバナシャンペーン校大学院外国語学研究科に学ばれ、外国語としての英語教授法で修士号を取得。1976年2月から再び日本に戻られ、1977年に広島女学院大学に専任講師として着任されました。1991年4月に同志社大学文学部に助教授として迎えられ、次いで言文センター、グローバル・コミュニケーション学部において、24年にわたってご尽力くださいました。

フォアマン先生は、さまざまなものに対する愛でいっぱいの方です。言葉に対する愛、教育に対する情熱、人への愛、日本と日本文化への愛。数え上げればきりがありません。

まず、先生は「幼いときから言語を愛していた」と常々おっしゃっているとおり、本当に英語を愛し、教えることを愛しておられる方です。業務として学校関係やその他の文章を英訳することを頼まれても、決して無味乾燥ないわゆる「翻訳調」には終わらず、いつも「一味違う」フォアマン先生の文章にされるのは見事。「なぜだか説明できないが小さいときからよい文章が書けた」タイプの人間なのだ、と納得します。そんな先生に、いつも英語の

質問をし、メンターになっていただけた者は幸運でした。

先生のご専門は英語教授法ですが、特にディベートの教授に秀で、ディベートに関する研究を長年続けてこられました。JALTでは1988年から1991年まで会長を務められ、JDA（日本ディベート学会）では理事に任じられています。また、15年来、折り紙に魅せられた先生は、折り紙を使って学生のコミュニケーション力を伸ばす授業の研究を続けられ、折り紙の国内外の学会でもご活躍です。

先生は、すばらしい英語の達人であると同時に、独創性と教育への熱情をもちあわせた、優れた語学教育者であります。学校からの帰り途、「教える」ことについて話し始めると止まらない先生は、常に「何のために学ぶのか」「何を学ばせるのか」という原点を見失わない方です。そしてその原点は、「新しい視点からものを見つめ、考えることを学ばせる」ということだと思います。ディベートの授業や上級科目のクラスで先生の教えを受けた学生の多くが、英語の上達だけでなく、「あのときに学んだことが本当に有意義だった」と、後年謝意を表していることから、それはうかがい知れます。「語学の先生」は誰にでもできるといった発言に対し先生は怒りを隠さない方ですが、そのような考えをもつ人は、先生がなさってこられた教育の功績の前に頭を垂れるべきでしょう。

自分はアメリカ人だが、日本人的な感性が自分の中で勝ってきているのか、アメリカに戻ったときにショックを受けると話される先生は、文字通り「日本人以上に」日本の食やさまざまな文化を愛する方ですが、中でも特筆すべきは、先生の文楽への愛と情熱でしょう。言文センター時代から、多くの同僚がデボラ先生を通じて文楽に触れ、その楽しさを学ばせてもらいました。今では先生の「知と肉」ともなっている文楽への思いと、培ってこられた知識は、今グローバル・コミュニケーション学部の日本文化の講義で活かされています。先生から英語で文楽について学ぶ学生は、自分たちが自国の文化を知らないということを知り、「日本のことは日本人にしかわからない」という思い込みに捉われていたことにも気づいたのです。

そして最後に、デボラ先生の一番大きな特質が、同僚や友人に対する、細やかな心配りとやさしさ、そして常に周りの人のよいところをほめ、そこか

ら学べることが幸せだとおっしゃる、前向きな姿勢だと思います。美しいものの、洒落たものが好きで、身に着けることを楽しまれる先生は、その素敵なファッションと楽しい会話で、いつも同僚を元気づけてくださいました。そしてそのお人柄で、私たちを優しく包んでくださいました。本当にありがとうございました。

先生が去られると思うと、ぽっかりと穴が開いたように淋しくなります。ですが、ご退職後も、京田辺で教鞭をとってくださるとのこと、大変うれしく、心強く思っています。ご健康に留意され、ますますお仕事と趣味を楽しめますように、願っています。

